

※解答はすべて解答用紙に記入しなさい。問いに字数の指定がある場合は、句読点や記号も一字に数えて解答すること。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文に一部省略した箇所があります。

情報というものは、そのスピードと量を級数的に増やし、世界を駆けめぐっています。かつてアメリカの副大統領が高らかにセンゲン^①したことがあります。「我々は来たる情報化時代に備え、世界中をネット回線によるハイウェイで結ぶつもりだ。誰もが瞬時に情報を送り、そして手にすることが出来る時代になるのだ」と。実際そうなったと感じている人は多いと思います。

フィンランドのある教授が二十世紀の終わり頃、私にこう言いました。「瞬時に情報が駆けめぐっても良いことなんかあると思うかね。そんなにたくさん情報を処理できるほど、我々はヒマでもないし、賢くもないよ。……だいたい、現状を見る限り、駆けめぐっているのは『知 (wisdom)』ではなく、『痴 (stupidity)』ばかりではないのかね」と。確かにインターネット使用の多くは、一般にキケン^②と考えられる物を扱うサイト、他人の中傷など、匿名性に隠れた陰湿なものが中心だと感じます。

まあ、はっきり言っておきましょう。現在、インターネットで発信されている情報のほとんどは、「ゴミ」です。たしかにネット情報のスピードと量はこれまでの常識を超えています。うまく使いこなせば、社会の中で有力なブキ^③となる可能性があるでしょう。

1 使いこなすには、その前提となる能力が必要なのです。その前提となる能力は、(私の分類では)少なくとも三つあります。まず基礎となる「教養」がひとつめ。そして「リサーチ・リテラシー」と私が勝手に呼ぶ、事実や数字を正しく読むための能力。最後にゴミの中から本物を嗅ぎ分ける能力で、私が「セレンディピティ (serendipity)」と呼ぶ総合的な思考力の三つです。この三つは相互に排他的なものではありません。重なり合い、相互に影響しあうものと考えてよいでしょう。

基礎となる教養は、何をするにも必要で、この世の中を生きていく基本であるので、あえて多くは述べません。ただひとつだけ確認しておきたいことは、教養とは、学校で習う、そしてテストに出る知識だけではないということです。世の中すべての出来事、すべての知識は教養であり、その最低限必要な範囲は各自が決める問題に過ぎません。よく大学などで見かけますが、専門知識で頭の中を一杯にし、その他のことは何もできないいわゆる「学者バカ」的人間がいます。逆に学校の成績はそれほどではないが、やたら雑学に長けた人もいます。まあバランスの問題だと思いますが、^①学者とて無教養な人になりうるし、成績は悪くても教養人もいるわけです。

「リサーチ・リテラシー」とは早い話が、^注第一章から前章までのような知識を持ち、数字を利用してウソをつく人々を見分ける能力のことです。赤川^{あかがわまなぶ}学先生の言葉を借りるなら、メディアなどのリサーチに対し「ツツコミを入れる能力」(赤川、二〇〇三)です(同旨として、パオロ・マツツアリーノ、二〇〇七)。ネット上などの数字を使ったゴミは、大半がリサーチ・リテラシーを持つことで見分けがつくでしょう。実際に調査を企画し、質問票作りやデータ収集を経験した人は、このリサーチ・リテラシーの初歩を持つことになり、明白なゴミはすぐわかるようになるはず^②です。逆説的ではありませんが、自分で数字を操作したり、一定の結論を導き出そうと苦労した人は、他人のウソやごまかしを見破るのがより上手くなるわけです。これもリサーチ・リテラシーが向上した例と考えてよいでしょう。

研究者 2 その予備軍の大学院生にとって、リサーチ・リテラシーは今後、不可欠の素養となるに違いありません。単なる抽象的、主観的なアイデアだけで論文を完成できることは例外で、特に研究者の卵といえる大学院生は、データを扱うレベルの論文からスタートすることがほとんどのケースとなります。トピックを決め、仮説を設定し、それをデータで検証するという、いわば実証研究の王道が中心となるのです。(中略)

リサーチ・リテラシーはテクニカルに身につくものが大半で、テキストを学ぼうという努力次第で手に入るものと考えられます。しかし、確立した学習プロセス(テキスト)がまだ存在しないのが、次に述べる「セレンディピティ」の世界です。

セレンディピティとは、辞書的説明では「掘り出し物(3)をみつける才能」とあります。この語はよく、豚ぶたが地面深く埋まったトリュフを探し出す時などに使用されるため、私は「嗅ぎ分ける能力」と訳していますが、必要なものだけでなく、不要なものを嗅ぎ分ける能力をも意味します。データや情報があふれる世界で今後必要になるであろう能力は、必要なデータや情報、有用なデータや情報を短時間で見極めること、そして不要なもの(ゴミ)は切り捨てる能力です。それがセレンディピティなのです。

セレンディピティ能力を鍛えるには、とにかく「考えるくせ」をつける必要があります。世の中の情報を鵜呑みにしないこと。エライ評論家やニュース・キャスターが、したり顔で解説することにも常に疑問をもつ。現段階で言えることは、そうした「くせ」がセレンディピティ能力を向上させるといふことだけです。

考えるくせをつけるには、あえてそうする必要があります。私が実践していることをひとつだけ示しておきます。大事件が起こった時、私はテレビを消し、新聞も読まず、まず考えることにしています。それぞれの立場に自分を置いて、その立場で重要視する要素は何だろうか。

あの「9・11」と呼ばれる二〇〇一年の同時テロ事件が起こったのは、日本時間では深夜であったため、私が入ったのは朝起きてテレビをつけたあとでした。ひととおり内容を把握したのち、私はテレビを消し、新聞も読まずに考えました。次に何が起こるだろうか。アメリカは、イスラエルは、アラブ諸国は、ヨーロッパの国々は、国連は、どう動くだろうか。そして日本の首相はどうすべきなのか、そしてどうするだろうか。最後に私個人はどうすべきかと。

考えがまとまったあと、もう一度テレビをつけ新聞を読みました。それからの数日は各紙の論調や、識者の意見を讀みつづけたのでした。私が考えていなかった視点を示す記事を見つけた時は、自らの不明を反省します。そして将来同じ不明を繰り返さないよう心掛けるのみです。むろん私から見ても未熟でとんでもない意見もいっぱいありますが、そんなものはどうでもよい。無視します。より重要なことは、新しい知見を発見し、自分のセレンディピティ能力に磨きをかけることなのです。私もまだまだ未熟だというのは、そのとおりでしょう。

教養も、リサーチ・リテラシーもない段階では、より上位概念たるセレンディピティは得られないと思います。これらは短時間で修得できるものではありませんし、誰もが努力次第で手に入れられると保証することもできません。しかしこれだけは言い切れます。何の疑問もなく情報を受け入れる。考えもせず単に自分の立場で不満を述べる。そもそも考えようとしなくて記事や評論を鵜呑みにする人々には、永遠にセレンディピティは手に入りません。それらの人々は、情報に接しても、本物と偽物の見分けがつかないため、膨大な時間を浪費するか、そもそも何もしようとしないうる人生を送ることでしょう。残念なことです。

(谷岡一郎「データはウソをつく 科学的な社会調査の方法」による)

注 第一章から前章：…本文より前の内容を指す。

問一 線部①～③のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 本文中の 1・2 に入れるのに適当な言葉を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア および イ ただし ウ たとえば エ つまり オ だから

問三 冒頭部分でアメリカの副大統領とフィンランドの教授の発言が引用されていますが、この部分の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

国 語 問 題

(一〇枚のうちの三枚め)

ア アメリカの副大統領は今後の情報化による国民の生活の変化を問題視している。
 イ アメリカの副大統領は今後の情報化によるネット回線の整備費用を問題視している。
 ウ フィンランドの教授は情報化の現状について情報の量と質を問題視している。
 エ フィンランドの教授は情報化の現状について個人間の情報格差を問題視している。

問四 —— 線部(1)とありますが、それはどのような人ですか。解答欄の形式にしたがって本文中から三十字以内で抜き出して答えなさい。

問五 —— 線部(2)とありますが、このことについて説明した次の文の [1]・[2] に入れるのに適当な表現を、本文中の言葉を用いてそれぞれ答えなさい。

リサーチ・リテラシーは、 [1] 能力であるが、自ら [2] ことによってかえってその能力は向上すること。

問六 —— 線部(3)とありますが、具体的に何を指していますか。本文中から二十字以内で抜き出して答えなさい。

問七 筆者は「セレンディピティ能力」を向上させるためにはどうすることが必要だと述べていますか。六十字以内で説明しなさい。

問八 本文について話し合っている四人の対話を読んで、 [1] [5] に入れるのに適当な表現をそれぞれ答えなさい。ただし [3] は、本文中から一文で探し、その最初の五字を抜き出しなさい。

石川さん 私は筆者が重視している三つの能力の関係は、本文中の「重なり合い、相互に影響しあうもの」という表現から、ベン図(図1)のようなものだと考えました。

野村さん なるほど。私は三角形(図2)の階層構造で考えてみました。三つの能力のうち一番下に [1] がきて、上に重なっていくイメージです。 [2] が一番上にくるのは本文中に「 [3] 」と書いてあるからです。

南さん 本文の「リサーチ・リテラシー」とは、たとえばどういうことですか。

林さん そうですね。私はこの間、新聞の読者にアンケート調査をしている記事を見ました。「本を読むのは好きですか。」という問いに対して一六七九人の回答のうち88%がイエスでした。では、それを受けて「日本人の本離れは進んでいない」と言えると思いますか。

石川さん 難しいですね。本離れはよく問題になっているのにそれとは反対の結果ですね。

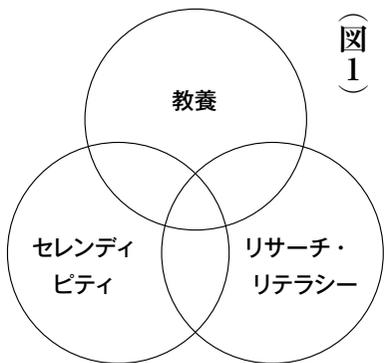
林さん この結果が出るのはごく自然なことです。なぜならアンケートに答えた人が新聞の読者だということは、 [4] ということを意味しているからです。

南さん たしかにそれだと数字は高く出ますね。なるほど、そうしたことに気づけるのがリサーチ・リテラシーというものですね。では、「セレンディピティ」とは、どのようなものですか。

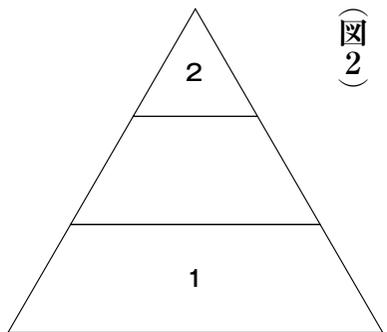
林さん 科学の世界ではよく聞く言葉です。田中耕一さんを知っていますか。この人は、実験中の失敗から新たな発見をしてノーベル化学賞を受賞しました。セレンディピティはこのように偶然の出会いから直観的に自分にとって有益なものを見つけ出します。だから、本文で筆者はこの能力を「 [5] 」と表現していますね。

国語問題

(一〇枚のうちの四枚め)



(図1)



(図2)

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

結子は星野百貨店創業者の孫であるが、その立場を隠して店員として働いている。彼女は経営状況の厳しい店の再建を目指して、店のひとびとに声をかけ、その悩みや思い出話に耳を傾けていた。

「ありやどれくらい前のことになるのかなあ」

地下一階の市場の、総菜も置いている鮮魚店の老いた主が話してくれた。「この百貨店、子どもや学生さんの来客が多いじゃないですか。ほら、街中の店ですしね。で、いつも来てる子たちだと顔を覚えちゃって。お利口さんな子どもだと、特にやっぱりね、かわいくなってきたりするんですよ。で、鷹城さん夫妻は、ふたりとも、そういう子たちだった、というわけです」

百貨店に限らず、店に対して、懐かしみや親しみを覚えるひとは多い。結子は自分自身も他の店では客の立場なので、その辺りの感情もわかる。すると店や店員さんたちが、家族や友人のように大事になったりもするものだ。――ちょうど、鷹城夫妻のように。

一方で、店で働くひとびともまた、馴染みのお客様や印象の強いお客様のことを覚える。客側と同じような愛情を持って見守っていることもある。彼ら側からは、その感情を表に出さないこともあるけれど。けれど彼らは、客のことをいつも見て、記憶しているのだ。

接客業のひとつとは、もちろんすべてのお客様に対して、安定した、誠実な応対をすることを求められている。それが「プロの対応」でもある。けれど、彼らもひとの心を持っている。もし最高のサービスが見たいなら、客の側もプロの客になればよい。それは、カジュアルな店から、一流の店やホテルまで、すべてにいえることだと結子は思っている。

「このお客様のために、何かしてあげたい」

「このお客様に、喜んで欲しい」

そう思ったとき生まれるサービスは百パーセントを超えるレベルと熱量のものとなる。

鷹城夫妻は、その昔ひそかに星野百貨店のひとびとから愛されていた。百貨店はみなでお客様の情報を共有する。そのせいもあって、いつも彼らの話は癒やされる子どもたちとして、語られてきた。特に『お利口くん』と呼ばれていた、鷹城少年はそうだった。

彼は最初は幸せな子どもとして、店のひとびとに記憶されていた。日曜ごとに一家で百貨店に来る家族の、彼は優

国語問題

(一〇枚のうちの五枚め)

しいお兄ちゃんとして、小さな弟と妹の面倒を見る子どもだった。両親も人の良さそうなひとたちで、買い物をするときも、常に笑顔で物腰は穏やか。レジを打つとき、癒やされた。絵に描いたような幸せそうな一家だよねえ、と、ひそかにささやかれていた。

ところがあるとき、おもちゃ売り場の販売員が、『お利口くん』の家、なんかあったらしいですよ」と、心配そうに、話した。

クリスマスが近づいたある日、元気の無い『お利口くん』が、おもちゃ売りにやってきて、「小学校一年生の男の子と、二年生の女の子が喜ぶようなおもちゃは、どれになるでしょうか？」

折られたんだ千円札が数枚入った、小さな財布を持っていたという。

「今年からサンタクロースがうちに来ないから、ぼくがサンタさんになるんです。ちゃんとプレゼントを弟と妹の枕元に置かなくちゃいけない」と、笑顔でいったのだという。

社員食堂でそれを聞いた、遊園地でアルバイトをしている学生が、ああ、と声を暗くした。

「あの子ね、こないだ、屋上遊園地でひとりで泣いてるところを見ましたよ。気になって話しかけたら、お父さん死んじゃったって。病気で長く入院なさってたらしくて」

そうなの、そうかあ、という声が食堂のあちこちで上がったそうだ。

「この頃、『お利口くん』ちのお父さん、姿を見かけなかったものな」

「いいひとだったよなあ」

空気がしんみりとした。

ひとりがおもちゃ売り場の販売員に訊いた。

「それで、『お利口くん』にはどんなおもちゃを薦めたんだ？ あまり高いものじゃなくて、その、何かいいものがあったのか？」

その頃は、この百貨店にあった、家電・電化製品売り場のフロアの販売員だったそうだ。

「いや、とっさのことだし、ちょっと思いつかなかったから、宿題ってことにして貰って、いったん帰って貰ったんです。店長やメーカーのひとたちに相談しようと思って。だって」

彼は（ ）を噛んだ。涙をこらえるように。

「あの財布に入ってたのって、あの子のお小遣いだと思うんですよ。お年玉とか使わずに貯めておいたんじゃないかなあ、何か自分の欲しいものを買うために。そんな大事なお金で、死んだお父さんの代わりに、自分がサンタクロースになって、きょうだいにプレゼントを買おうって。自分もまだ子どもじゃないですか。サンタさんからプレゼントが欲しい年でしょうに」

もし店内のおもちゃが自分の物ならば、その子に無料で何もかもあげたいと思っただろう。その場にいた皆が思った。けれどここは百貨店。置いてあるものは売り物だ。

だから、彼は上司や取引先のおもちゃ会社のひとびとに相談した。おとなたちは、意見を出し合い、少しでも少年の負担にならない方向で、小さな妹と弟が喜びそうな物を考えた。次の日にやってきた『お利口くん』に、おもちゃ売り場の販売員は、プレゼント候補の品々を見せた。少年は顔を輝かせて、プレゼントを選び、何度もお札をいって帰っていった。——少年は、この贈り物を選ぶのに、どれだけのひとびとが時間と頭を使ったか知らなかっただろう。それでいいのだと星野百貨店のひとびとは思っていた。ただ、優しい精霊が見守るように、彼と、残された一家の

ことを見守っていたのだ。

その後、『お利口くん』と家族が店に来ることに、いつも少しだけラッキーなことが起きた。地下一階の市場で母さんが量り売りのお漬物を買ったら、「切りのいいところまで入れてあげるね」と、少しだけ多めに袋に詰めて

もらえたり。まだタイムセールlerの時間ではないはずなのに、お総菜が安くなったり。そのたびに一家はとても喜んだのだった。

ほんのささやかな贈り物が、いつもひそかに彼らには用意されていたのだった。

そんな話を結子に懐かしそうに話してくれた、化粧品売り場の販売員がいる。国産のブランドの美容部員。元気で強気なおばさまだった。

「わたしも当時、『お利口くん』一家を見守っていたひとりよ。小さな妹ちゃんに粗品のぬいぐるみあげて喜ばれたりしてたの。正直、わたしはふだん、そんなに善人じゃないのね。子どももたいして好きじゃない。でもあの『お利口くん』はほんとにいい子だったから。つい、ね」

照れくさそうに笑った。「あの子がおとなになって帰ってくるって、まあそりゃわたしも年をとるはずよね。すっかりおばあちゃんになっちゃってさ。でも立派になってくれて、ほんとうによかった。亡くなったお父さんも、天国で喜んでらっしゃるでしょうね」

鷹城、という名字はあまり聞くものではない。そして当時『お利口くん』に接していたひとびとは、その後の彼がどう成長したか、いつも気にかけていた。なので、大学進学を機にこの街を離れていた彼が、成長後、新聞に取り上げられるような立派な人物になったとき、百貨店のひとびとはすぐに気づいた。子ども時代の面影がある写真入りの記事を見、切り取って回覧して、みんなでよかったよかったと喜んだのだそうだ。——もと『お利口くん』だった青年は、そんなことは知らないまま、遠い街や国を旅して成長してゆき、そしていま、風早に帰ってきたのだった。

(それはまあ、大歓迎にもなるわよね)
結子は微笑んで、梅昆布茶をすする。何しろ、本物のアイドルの帰還なのだから。

(村山早紀「百貨の魔法」による)

注 風早：星野百貨店がある街の名前。

問一 〜〜線部A・B・Cについて、次の各問いに答えなさい。

(I) 〜〜線部Aの「物腰」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 容姿 イ ふるまい ウ 着こなし エ 気配り

(II) 〜〜線部Bのここでの意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 社交的 イ 幻想的 ウ 現実的 エ 理想的

(III) 〜〜線部Cの()に入れるのに最も適当な言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 指 イ 舌 ウ 唇 エ 爪

問二 〜〜線部(1)とありますが、これはどのような気持ちを指していますか。本文中の言葉を用いて二十字以内で答えなさい。

問三 〜〜線部(2)とありますが、実際にそのような「サービス」がここより後の文章に描かれています。その場面を本文中から探し、「百パーセントを超えるレベルと熱量」である様子がわかるように、「〜という場面。」に続く形で説明しなさい。

問四 〜〜線部(3)とありますが、このときの鷹城少年を説明したものととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 亡き父の代わりとして妹や弟を喜ばせるために、自分自身の悲しみをこらえ、気を強く持とうとしている。
 イ 以前、店の人に泣き顔を見られて弱音をはいたことを恥ずかしく思い、今度は平気なふりをしている。
 ウ クリスマス前のおもちや売り場の楽しい雰囲気ふんいきに触れ、今の自分の状況を忘れて心が浮き立っている。
 エ 父が亡くなったことをすでに店のみんなが知っているの、同情されたくないと思って強がっている。

問五 —— 線部(4)とありますが、誰の、どのようなところをたとえたものですか。本文中の言葉を用いて説明しなさい。

問六 本文の表現と内容について説明したものとして**適当でないもの**を、次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 各売り場の店員やアルバイトの人たちが食堂をコミュニケーションの場としており、そこでの会話をくわしく表すことによって、読者がその様子をありありと思い浮かべることができるよう工夫されている。

イ 店に集うさまざまな立場の人を登場させることによって、星野百貨店が彼らを結びつけ、人間味あふれる交流をうながす舞台となっていることを印象づけている。

ウ 星野百貨店という具体的な場所で、「店側」と「客側」を対比的に描くことによって、「プロの対応」というものは店で働くひとびとにのみ要求されていることが理解できるようになっている。

エ 「お利口くん」「本物のアイドル」という表現により、鷹城少年を知る星野百貨店の店員にとって彼が大人になってもなお印象深い大切な存在でありつづけていることを示している。

オ 体言止めや短めのわかりやすい表現を用いて読者に軽快な印象を与えることによって、星野百貨店の経営状況の深刻さがかえって浮き彫りぼになるように工夫されている。

カ 主人公の結子が店員たちの回想を聞き取り、解説しながらつなぎ合わせていく構成により、鷹城一家と星野百貨店とのつながりが次第にはっきりしてくる仕掛けになっている。

三 次の各問いに答えなさい。

(I) 次の対話文は、脳科学者の茂木健一郎もぎけんいちろうさんと俳句作家の夏井いつきさんの対談の一部です。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、原文に付されていた注やそれに関わる傍線ほうせんなどを外しています。

茂木 俳句とは何でしょうか。

夏井 よく同じような質問をされます。いろいろないい方ができると思うのですが、俳句を続けるということは、当たり前のように気づき直す作業だと私は考えます。

たとえば、そこに花が植えられていて毎年咲いている。そこに木があつて毎年虫が鳴きはじめる。それらは自分をとり囲むものとしてずっとそこにあるのに、俳句をやることで「あつ、これがここにあるんだ」ということに季語として気づき直すんですね。それが俳句の楽しさなんだと思います。

茂木 なるほど、そういうことか。

夏井 これは個人的な体験なんですけど、俳句をはじめて四、五年たったころ、仲間雪月花をテーマにそれぞれ百句ずつ作ってみようということになりました。一種のトレーニングですね。月の句を百句作るためにベランダや庭に出てよく空を見ていました。ある夜、とても月が明るく、月の後ろの空が明確に見えました。そのときに「夜なのに空って青いんだ」と、当たり前のことにはっと気づいて、その気づき、発見が面白いなと思ったのです。

このような季語と季語の周辺にあるようなものに気づき直していくというのが、俳句ではないかと思っています。
茂木 ほほう、それは大変面白い。脳科学をやっている者からすると、発見や気づきというのは脳にとって最大の喜びだといえるのです。

夏井 最大の喜びですか。このとき、脳内ではどのようなことが起きているのですか。

茂木 脳内の中脳からドーパミンという物質が前頭葉のいろいろなところに放出されるのですが、とくに重要なのは「快楽」や「報酬」に關与する「A10神経」と呼ばれる神経系なんです。これはお酒やタバコなどによっても放出されるもので、依存症とも関係が深いものです。このA10神経を中心とするドーパミンの回路というのは、基本的に、自分が認知していることと出会ったこととの差異に反応するということが、実験的にも理論的にも示されています。

夏井先生が、月を詠もうとされていたときに背景の空が夜でも青い、ということに気づかれた。そのことが、いままでに知っていたことと思っていたことと、実際に体験したこととの差にほかならないのです。そして、その差が意外で深いものであるほど、ドーパミンが放出される。そうすると、脳の中ではドーパミンが出るきっかけとなった回路、この場合でいうと「見る」とか「解釈する」「読み取る」といった回路が強化される。つまり、「強化学習」というのが起こることが知られているんですね。脳の回路が強まる、すなわちその瞬間、夏井先生の脳は強くなったのですよ。

夏井 季語に気づき直す作業で脳が強くなるんですか。その場合、知っていることと、実際の体験がかけ離れすぎていてもだめなのですか。

茂木 どうでしょうか。確かに、自分の常識や既存の観念から飛んでいるものほど気づきにくいということはあります。でも、それができた瞬間に、ひじょうに大きな喜びがあるはずなのです。先生が月の向こうに青い空があるって気づかれたのは、大きな気づきの一つだと思われれます。

山路来て何やらゆかしすみれ草 芭蕉

この句の芭蕉の気づきも大きいものだったと思いますが、小さなもの、大きなもの、いろいろな気づきがあったいいのではないのでしょうか。

(夏井いつき「夏井いつきの超カンタン! 俳句塾」による)

問一 —— 線部とありますが、その答えを三十五字以内で答えなさい。

問二 芭蕉の句について、

(A) 季語と季節をそれぞれ答えなさい。

(B) 芭蕉にどのような気づきがあったと読むことができるかを説明した次の文の 1 へ 3 に入れるのに適当な言葉を自分で考えて答えなさい。

1 を歩いていると、必然的に視線が 2 に向かう。あるいはひと休みしようと地面に腰を下ろすことがある。そんなとき普段は気づきにくい小さな 3 の存在に目が留まり、心ひかれた。その驚きと感動がこの作品を生んでいると思われる。

国語問題

(一〇枚のうちの九枚め)

問三 この対談における二人のコミュニケーションのとり方の説明として、次に示す選択肢が茂木さんに当てはまる場合はA、夏井さんに当てはまる場合はB、両者に当てはまる場合はC、両者に当てはまらない場合はDで答えなさい。

- ア 相手の話に共感的に反応している。
- イ 相手の話の内容をうけて、自分の専門的領域につないで理解を示している。
- ウ 相手の話を確認しながらさらに問いかけている。

(Ⅱ) 次の各問いに答えなさい。

問一 次の中から傍線部の表現の使い方として正しいもの一つずつ選び、記号で答えなさい。

- 1 ア 君の月並みな意見を聞くことができてとても良かった。
イ 試験で高をくくるためには努力が必要だ。
ウ なぜそんなことをしたのかと首をかしげた。
エ 彼女の不快な言動に目を細めた。
- 2 ア あまりのショックで心を砕いた。
イ 彼の手腕はあざやかで腑に落ちない。
ウ あの人に久しぶりに会えると思うと気が引ける。
エ 二人の激しい争いに思わず固唾を呑んだ。

問二 次の熟語は対義語の組み合わせになっています。□に入れるのに適当な漢字一字をそれぞれ答えなさい。

- ア 集合 ↔ 解 □
- イ 実物 ↔ □ 型
- ウ 拡大 ↔ □ 小

国語解答用紙

(一〇枚のうちの二〇枚め)

★次の点に注意して答えなさい。

問いに「三十文字以内で答えなさい」というように、字数の指定がある場合には、句読点や記号も一字に数えて解答すること。

得点欄

問一		問二		問三		問四		問五		問六		問七		問八	
①	②	③	問二	1	2	1	人。	2	1	2	3	1	2	3	5
問一		問二		問三		問四		問五		問六		問七		問八	
1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	4
問一		問二		問三		問四		問五		問六		問七		問八	
①		②		③		問二		1		2		3		5	

一	二	三	四	五	六	七	八
<input type="text"/>							

問一		問二		問三		問四		問五		問六	
(I)	(II)	(III)	という場面。								
問一		問二		問三		問四		問五		問六	
1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3

一	二	三	四	五	六
<input type="text"/>					

問一		問二		問三		問四		問五		問六	
(I)	(II)	季節	季節	1	2	3	1	2	3	1	2
問一		問二		問三		問四		問五		問六	
1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3

合計
<input type="text"/>

一	二	三	一	二
<input type="text"/>				